

講演3

人類研の目指したものの、 そして目指すべきもの



後藤 明

(南山大学人文学部・教授／人類学研究所・第二種研究所員)

今ご紹介いただきました、南山大学の後藤です。私は2010年から2018年3月までの4期、所長を拝命しております、その話を後半でしたいのですが、まず前半では、1949年に設立された人類学研究所の、当時は人類学・民族学研究所でしたが、第1期のお話をします。さらに1979年に改組がおこなわれて、それを第2期といたします。そして、その後、一時活動が停滞した時期があるのですが、2010年にいわば再スタートしたという話を後半でしていきたいと思います。

既に山田先生やクネヒト先生のお話でもありましたが、1949年に人類学・民族学研究所として設置されたのが人類研のスタートです。当時は学長がパツへ、沼澤喜市先生が所長、それから、京都大学から中山英司さんが赴任して、当初は沼澤・中山で運営をしており、さらに言語学のレンメルヒルト氏が加わり、3人でスタートしました。

これについては、私のレジュメの参考文献に書いてあります『人類学研究所通信』第17・18号を、PDFで人類学研究所のウェブサイトから誰でも読めますので、読んでください。これに関しては、考古学の教授であった早川正一先生および大塚達朗先生に過去のことをお話しいただいたことに基本的に依拠しておりますので、詳しくはそちらを読んでいただければ分かります。

人類研開始期は、こういう構想でした。これは構想であって実現したわけではないのですが、ご覧になるとわかるように有名人がずらっと並んでいます(表1)。敬称は省略させていた

初代所長	沼澤喜市(民族学者)
副所長	中山英司(形質人類学者)
民族学部	沼澤喜市、マテオ・エーダー
言語学部	浅井恵倫、フランシス・ギート、アントン・レンメルヒルト
人類学・考古学部	中山英司、清野謙次
賛助員	岡正雄、石田英一郎、水野清一、駒井和愛、金関丈夫
顧問	ヴァイルヘルム・シュミット、デル・レ、長谷部言人、原田淑人、渋沢敬三、梅原末治、松本信廣、金田一京助、柳田國男
助手、写真技手、図工、タイピスト、調査補助員、庶務会計事務員	

(渡邊 学(編)2010b 「人類学研究所小史」『人類学研究所通信』17/18、p3を参考に作成)

表 1

ですが、例えば、岡正雄、石田英一郎、水野清一などそうそうたる名前、また原田淑人は東京大学考古学研究室の初代主任教授、駒井和愛は同じく2代目の主任教授です。顧問にシュミットの名前もあります。長谷部言人は東大の人類学、人骨研究の第一人者です。渋沢敬三、松本信廣、金田一京助、柳田國男などはいうに及びませんね。梅原末治は京都大学考古学研究室の主任教授です。全員、説明を要しないような超有名人です。オールジャパンという感じでやっぺいこうという構想が最初にあったようです。

そして、これは早川正一先生のお作りになった、年表です(表2)。ここに示されたとおり、初期の人類学研究所は、たくさんの神言会の神父の方々が中心になっていたということです。

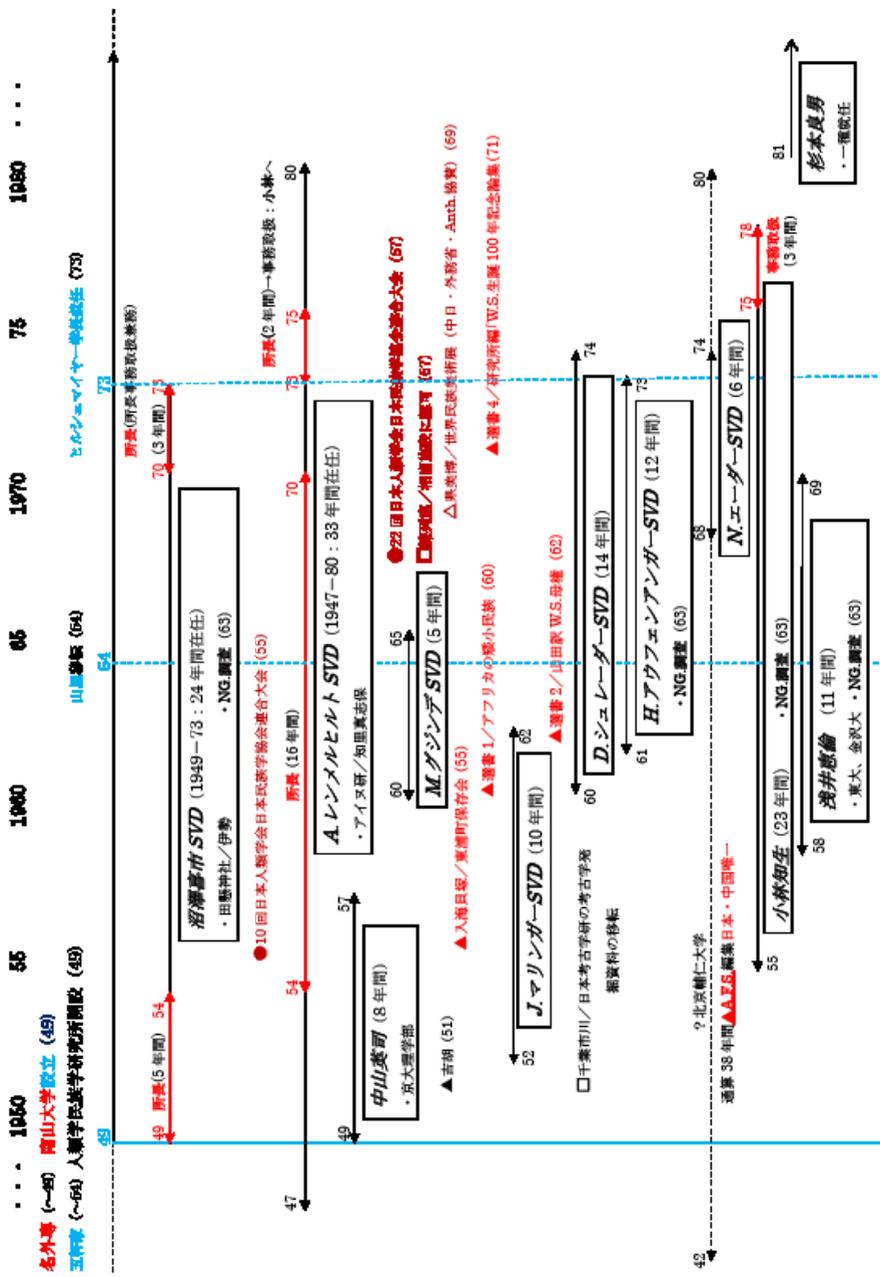
沼澤先生は神話学や宗教研究、中山先生は考古学というか、どちらかという人骨の研究をされていた方です。さらに、1952年から、旧石器をやっていたマリンガー神父が赴任し、10年後にドイツに戻ります。1960年から1965年まで、先ほど出ましたマルティン・グジンデ神父、1960年にはドミニク・シュレーダー神父、シュレーダー神父は、人喰いやカニバリズムの講義を人類学科でやっていたと聞いています。

さらに、1961年からハインリッヒ・アウフェンアンガー神父が所員になり、パプアニューギニアの調査などをされ、その資料は今、人類学博物館に収蔵されています。日本人がおこなった最も早いパプアニューギニアの調査だと思います。素晴らしい資料が残されています。それから、1968年ごろ、これはクネヒト先生がおっしゃったエーデル神父が『Asian Folklore Studies』を携えて移動してこられたということです。

昨年、私は、オーストリアのグラーツで開かれたヨーロッパ考古天文学会に出たときにウィーンに寄ったのですが、かつての「民俗学博物館」が、今は「世界文化博物館(Weltkultur Museum in Wien)」と名前を変えて、リニューアルされました。ドイツ語圏の博物館は「エスノロジー」という言葉をほとんどやめて、「世界文化博物館」と言っています。

実はここで、1つの部屋を全部使って神言会というか独逸学派の展示がおこなわれています。例えばシュミットの展示、説明がいろいろあります。しかしこれは文化圏学派を称えるわけでもなく、学史の中で批判も含めて捉えようという展示です。ですので、いろいろ批判的なことも書いてあって、シュミットのところでは、「Wertfreie Wissenschaft?」、いわゆる価値に中立な学問というのはあり得るのかどうか、とくに人文科学・社会科学の場合、価値観から独立した研究ができるのかどうかという、ウェーバー以来の大きな問いを掛けるような説明がドイツ語と英語でされています。

その中に、実はグジンデ神父の展示コーナーもありました。それ以外にも、コッパースやシェベスタ、そういう人たちの写真と業績が展示されています。ぜひご覧ください。



出典：人類学研究所旧ホームページ(早川正一作成)

表 2

グジンデ神父収集の、フエゴ島先住民の民族資料の実物も展示されています。左上は、魚を突く銚先です(写真1)。実は個人的なことを申しますと、私が東大の考古学研究室の卒業論文で書いたのが新大陸の銚です。それで、American Museum of Natural History(アメリカ自然史博物館)で、オーティス・メイソンという方が出しているアメリカ大陸の銚頭に関するモノグラフがあって、その中で南米のフエゴ島インディアンの銚の絵を見たりもしたのですが、どうもそのモデルがグジンデ神父の集めた、この資料のようです。図でしか見たことがなかったものの実物が見られたということで、モノをやっている人間としては、とても感動しました。



写真1



写真2

下は、フエゴ島インディアンの人が使っていた樹皮、木の皮を張ったカヌーです(写真2)。私は、その後にカヌーの研究をしているので、これは模型ですが、大変感動しました。それ以外にもさまざまな民族資料が展示されています。

最近、日本語で、グジンデ神父が研究したものを中心にして書かれた本があります。左側の写真は、先ほど山田先生が見せたと思いますが、たくさんの写真が載っています(写真3)。

ところで、私が研究所長になったときに、研究所長室に古いスライドやネガがありました。それを今、デジタル化しているのですが、8ミリ資料もありました。グジンデ神父が撮った写真もあります。『Die Feuer Lands(燃える土地)』という、こんな分厚いドイツ語の本に掲載された写真の原板みたいな写真がありました。先ほど山田先生が、写真集が出たと言われましたが、その写真集に使った写真は人類研の所長室にある写真のコピーのようなものなのか、それとも

ゲジデが帰国するときにもち帰った残りの分が、ちょっと分からないのですが、ぜひ確認してみたいと思います。

これはマリンガー神父がもってきた旧石器のコレクションで、今は人類学博物館にあります。これはアフリカや日本の旧石器なのですが、とても貴重な資料です(写真4)。博物館で図録を出したら売切れて、再版しました。というのは、例えば国内の博物館などに、ヨーロッパ、アフリカなどの旧石器の資料がありますが、ほとんどがレプリカです。しかし、これは本物です。ヨーロッパやアフリカの本物の旧石器があるというのは、本当に今では考えられません。日本の資料と一部交換したと聞いております。このようなどても貴重なものが人類学研究所および人類学博物館には残っています。

もう一度この年表(表2)に戻ります。その後、小林知生先生さんや浅井恵倫先生あたりの方々が途中から加わって、ニューギニアの調査をしています。沼澤喜市先生も行かれています。アウフェンアンガーさんが中心になってニューギニアの研究なんかもおこなわれていたということです。ただし、1973年あたりで、今まで研究所を引

張ってきた神父の方々がことごとく帰国されたり亡くなられたりして、急激にメンバーが変わっていった時期があります。それが年表で、一目で分かると思います。

1973年にヨハネス・ヒルシュマイヤーさんが学長になりました。この先生はハーバード大学の経営学の先生だったらしく、早川正一先生に言わせると、どちらかという目が経営学のほうに向いていて、あまり人類学や外国語学、文学、そちらのほうは、やや手薄になっていったという傾向もあったことをお聞きしました。



写真3



写真4

さらに考古学の大家達朗先生からのメモを要約しますと、中山先生は1949年に赴任すると、渥美町(現田原市)の保美貝塚、伊川津貝塚、吉胡貝塚という重要な貝塚を相次いで調査したということです。これらは東海を代表する縄文末期の重要な貝塚です。大塚先生によると、戦前に考古学は「大東亜共栄圏」を拡大するという、考古学が軍隊に守られて、どんどん朝鮮半島を発掘したりした、つまり、日本の侵略のお先棒を担いようなどころがあるのですが、その戦前の反省から、科学的な考古学が志向され、その国営発掘の第1号が吉胡貝塚であったということです。そこでは、縄文土器の研究の大家である山内清男先生に加えて、お墓と人骨を中山先生が担当されたということです。

その資料は一部、人類学博物館に収蔵されています。この吉胡貝塚の発掘は、皆さんもよく知っている弥生時代の発掘の登呂遺跡に匹敵するような、戦後の日本考古学の最も重要な発掘の一つです。それに人類学研究所が関係していたということです。

この間、『人類学研究所紀要』というものも6年ほど出されて、1号から8号まで出されています。私はこの前、ざっと読んだのですが、半分ぐらひは考古学の論文です。つまり、1970年代の中ごろまでは人類学研究所の活動というのは、いわゆる民族学にプラスして、考古学や人骨研究が大きなウエートを占めていたわけです。このような構成というのは、いわゆる形質人類学、民族学、考古学、さらに言語学という、アメリカの人類学の構造といえます。私もアメリカで人類学を学んで、Ph.D.を取ったのでアメリカの人類学時代の教育を思い出しました。

後でクネヒト先生あたりにお聞きしたいのですが、こういう構成にシュミットはあまり満足していなかったということ、あるところで読んだことがあります。アメリカ流の総合人類学というのは、あまりお好みではなかったということ、ちらっと聞いたことがあります。

このような、学長が替わり、さらに神言会の神父の方々がことごとくいなくなるという流れがありました。1949年にできて30周年の1979年に、大きな改革があったということです。

このころ活躍されたのは、小林知生先生、山田隆治先生等が中心になっていきました。この間、おこなわれたのが、いわゆる共同研究でして、それが何冊かの本として刊行されています。この時期の特徴は、もともとかなり総合的な人類学を志向していた人類学研究所が、第2期に至って、どちらかというとアジアを中心にした宗教人類学に特化していったという傾向が見られると思います。外部・内部の先生が中心になって、3年ぐらひの共同研究をどんどんおこなっていったということです。その成果は本になって出ております。

白鳥芳郎先生、南山大学の山田隆治先生、倉田勇先生、それから、国立民族学博物館におられました杉本良男先生が一時ここにおられて、第一種研究所員として活躍されました。短期間ですが、慶應義塾大学に抜けられた吉原和男先生、それから、クネヒト先生、さらには宮沢

千尋先生が中心となって共同研究がずっとおこなわれていきました。

その成果は、このような本になっています(写真5)。山田先生の紹介にあった『母権』や『W・シュミット記念論文集』、『アフリカの矮小民族』といった本です。右側にあるのが、先ほど言いました、短期間ありました『人類学研究所紀要』です。



写真5

あと、一時期、名古屋大学から小谷凱宣先生がいらっしゃって、アイヌの研究をだいぶ盛んにされて、報告書を出しています。この報告書はすごくニーズがあって、今、確か人類研ではもう在庫がない、なかなか貴重な本になっております。

言い忘れましたが、人類学研究所の最初、第1期で何をを目指していたのかということです。

一つは、人類の進化史、人類史みたいなものです。もう一つは、やはり大きいのは、日本人の起源だったようです。日本人の起源に関連して、アイヌ民族の研究にもとても関心がありました。人骨なんかを盛んに集めたというのも、そういう流れであったということです。

大体、日本の考古学の歴史をひもときますと、多くの海外の研究者が最初は明治時代に、モースなどが来て、その指導のもとに始まったのです。そういう人たちの関心というのは、まず日本人の起源なのです。そういった関係で、アイヌ民族と日本人はどう関係するのか、さて縄文人はどうだという議論が多かったのです。つまり最初は、日本人の起源を人類史の中で位置付けるような関心が強かったように思います。

第2期は、どちらかというとな宗教人類学、社会人類学、とくにアジアの宗教人類学みたいなものを希求していったということです。

当時の研究所の目的を見ますと、「主としてアジア諸地域の基層的、伝統的な民族文化を研究対象とし、宗教民族学その他の諸問題ないしは、一定地域社会に関する比較的短期間の歴史人類学的な特定研究を実施」ということが書かれています。

これで一定の成果を上げたわけですが、私が所長になってから、ここを改訂いたしました。第3期の話に入っていきます。

実際に私が所長を引き受けて、第二種研究所員で助けていただいた先生方の中にはアフリ

カの専門家もいますし、新大陸の専門家もいますから、「アジア」というのは、ちょっとやりづら
いだろうと。しかし、日本という国に研究所がつくられた理由は、やはりアジアの研究をしたい
という基本線はあるということで、両方を兼ね備えるような目的にするために、「アジアを中核
として、その比較として世界諸地域の諸民族の文化を研究対象とする人類学的研究」としまし
た。そして、現代的な問題をいくつか入れてというように、研究所の目的を改訂しました。

私が所長を引き受ける2010年より前に、一時期、研究所の活動が停滞した時期がありま
す。その原因に関しては、今日はいちいち詮索はいたしません。

いくつかあると思います。例えば、南山大学で人類学が始まったときには、まだ人類学は日
本で新しい学問、珍しい学問で、東京大学、東京都立大学（一時期首都大学東京）、南山大学
が3大老舗で、貴重だったわけです。ところが、次第に、例えば国立民族学博物館ができて、大
きな中心的な組織ができていきます。さらに、メジャーな大学に文化人類学の先生が職を得
て、文化人類学の講座等ができていきます。いくつか研究拠点ができたわけです。

ただし、例えば京都大学にも文化人類学者はたくさんおられますが、いろいろなところに分
散しています。南山大学のように1つの学科に7～8人、考古学を入れると10人ぐらいの教員
が集まっているところは、日本ではなかなかありません。これは南山大学の強みでもあります。
しかし、それが、活動が一時停滞した一つの原因にもなっているというところがあります。

簡単に言いますと、それは、条件が良過ぎる、南山大学は揃い過ぎているのではないかと
いうことです。つまり、南山大学の中だけで学生の教育は完結してしまうほどの豊富なスタッフ
がいるものですから、あまり外に出ていこうとしなかったということです。

一つだけ、思い出を言います。私が2007年に南山大学に来たばかりのときに人類文化学科
で会議があって、人類学研究所はもう閉鎖するというのに合意が出されました。私は来てす
ぐに「あれ、研究所はなくなってしまうんだ」と思って、全然関わらなかったわけです。

ある時、最初のころに受けもった研究指導で喋っていた時に、「私は研究会に行くので、来週
の研究指導を休みたい」と言ったのです。そうしたら、その学生が何と言ったかという、「補講
はどうするんですか」と言うのです。1対1の研究指導です。

今は文科省から指導があって、休講したらちゃんと補講をするというのは分かっています。
ですが、これは私のようなオールド・ボーイのノスタルジーなのですが、大体、学問というのは、
どんどん他の大学のゼミに潜り込んで聞いてみたり、考古学の学生だったら、発掘に行くため
にゼミに来なかつたりということがよくありました。私もそうやってきた人間なのですが、たぶ
んその学生は、南山大学の中だけで自己完結していたのでしょう。実はその研究会というの
は、その学生がやるテーマに直結した研究会だったのです。私は、その学生が「ああ、先生、私

も付いていいですか!」みたいなことを言うと思っていたら、期待がはずれました。例えば、その後、私は2012年から中部地区の人類学の集まりである中部人類学談話会の会長も引き受けていたのですが、そういう会合にあまり学生が出てきません。教員もあまり出てきません。そのように、地域の中でも大学を越えて活動するという機運が少し足りないのではないかと思います。それは、逆に言うと、南山大学が恵まれ過ぎていたからだとは考えています。

一言で言うと、私というか、人類学を最初にやった人間ではなくて、たとえば出身は考古学で、日本の考古学をやっていくうちにちょっと飽き足らなくなって、日本ではできなかったのでアメリカに留学したという方が多いです。もともと経済学だった、あるいは教育学だった、地理学だったけれども、文化人類学のほうに自分から殻を破って乗り出して行く、苦勞していろいろなところを渡り歩いたりする人が多いのです。南山大学の場合、条件が良過ぎて、ここで勉強すれば十分というような感じだったのかなど。人類学研究所がなぜ停滞したかという理由の一つですが、私の前の所長の渡邊学先生の分析ですが、あまり周りの人が協力しなかったのではないかということが書かれています。何でそうなったのかなど。私はそのころは体験していないので分からないのですが、研究者一人一人が小さくまとまってしまうというか、そういう傾向があったのではないかと思います。南山大学の条件が良いがためにそのような傾向になってしまうのではないかと感じたという次第です。

私が2010年に所長を拝命したときに、ある意味では、グラウンド・ゼロからのスタートでした。何もなかったので、何をやってもいい。ですから、はっきり言って、とてもやりやすかったです。何をやっても良かったのです。

難しくはありませんでした。やることは決まっているじゃないですか。人文系の研究所だったら、やることというのは講演会や研究会をおこない、紀要などを出すことです。別にそんなに難しいことはありませんでした。

たとえば査読付き学術誌として、今や東海地区の貴重な人類学系の学術雑誌に『年報人類学研究』を開始しました。それから、共同研究の再開、その成果として『論集人類学研究』の発行をおこないました。公開研究会、シンポジウム、研究会等を積極的におこないました。「人類学フェスティバル」のような社会アウトリーチも始めました。それから、これは私の個人的なことなのですが、中部人類学談話会との連携です。私は2012年から2018年まで会長を務めておりまして、談話会の研究会をかなり積極的に、人類学研究所と共催をしてきたと思います。ですから、別に普通のことをやっただけの話だと思っています。

ポリシーとしましては、目指すべきものと考えたものが4つぐらいあります。

1つ目は、再スタートのキックオフとして、川田順三先生をお招きした講演会をおこないまし

た。そのタイトルは「新しいヒトの学を目指して」でした。人類を研究する研究所なので、人類というものを総合的に考える視点を、もう一度回復したいということです。これは第1期に目指したものに、やや近いような気はします。2つ目は、今、社会が直面している問題を扱わなければいけないだろうということです。それは、宗教対立など、いろいろとあります。2011年に東日本大震災が起きて、たまたま私は地元の民俗学者の気仙沼におられた川島秀一先生、福島岩崎真幸先生と知人だったので、震災の3カ月後に、震災を体験され、被害も受けられているお二人をお呼びして、人類学談話会で震災に関係した研究会をおこないました。その流れで、人類学研究所でもたびたび川島先生や岩崎先生をお呼びして、何度か研究会もやってきました。それが今、発展して、震災から危機やリスクの人類学の共同研究のようなものがずっと、数年間続いてきております。

右側の写真が川島先生です(写真6)。震災があつてすぐ2カ月後ぐらいに、私が個人的に訪ねたときです。

さらに、例えば「フタバから遠く離れて」という、原発の影響で双葉町から移住を余儀なくされた方々の映画の上映会などもおこないました。ちょうど地元でNGOをやっていて、いろいろ被害を受けた知人の方もお呼びして、ディスカッションもおこなったということです。



写真6

これに関連して、現在進行中ですが、国際化推進事業というものをおこないました。国際化推進事業というのは、南山大学の中で応募する基金があるのですが、3年継続でなにかしらかのお金がもらえる、安いのですが、一人ぐらい研究員の方を雇えるぐらいのお金がもらえる基金があつて、それに応募しました。

まず、テーマが「アジア人類学者ネットワーク」というものです。やはりアジアを基軸にして、アジアの人類学者がネットワークをつくりたいというものです。テーマとしては「災害」です。フィリピンやインドネシア、インドで同じような災害、津波や地震や台風や火山など、日本と同じような災害が起きていると。そういうときに人類学者がどのような役割を果たすべきか、ノウハウや体験をアジアの中で共有しようという趣旨でおこないました。

それが今も続いていて、今、第2期、2年目です。第1期は、先ほど言いました川島先生のような人を名古屋に呼んでシンポジウムをおこない、また、インドとインドネシアとフィリピンから

研究者をお呼びして、南山大学で国際シンポジウムをおこないました。第2期は、どこか別の国でシンポジウムをおこなうということで、今年の9月にフィリピンで、同じようなメンバーで、インドネシア、フィリピン、インド、そして日本で、日本からも何人か研究者が参加して、震災などを対象に危機に関するアジア人類学者のネットワークを維持するためのシンポジウムをおこなってきました。

そのときの写真です。左は、フィリピンのマニラの大学で会合をやっているところです(写真7)。右は、エクスカッションでピナツボ火山の見学におこなったときのものです(写真8)。ピナツボ火山の被災地は今、行くところを案内してもらえます。行くと言っても、水の中を歩いていくのではなくて、ジープで河原を走って行かなければならないのですが、アエタの方などが案内してくれます。そういう人たちをみんなで訪ねてみるということをしてきました。

つまり、研究所の国際化推進事業と絡めて、震災や危機の人類学のプロジェクトが進行中であるということです。これも一つ、私が立てた方針の関連です。

それと関連するのですが、やはり人類学というのは、国際的な刺激を常に受ける必要があるということで、海外の著名な研究者の講演を何回かおこなってきました。これは、神奈川大学がフランスの技術人類学の大家、フランソワ・シゴー先生をお呼びしたときに、謝礼金と名



写真7



写真8

古屋往復の旅費をこちらが出して、南山大学にもお呼びして、講演いただいたときの写真です(写真9)。

その後、ティム・インゴルド先生を東大が呼んだときに、やはり東京と名古屋の旅費、謝礼金を出して、講演をおこなったことがあります。さらに、写真はありませんが、フランスの有名なピエール・ルモニエ先生を京都大学が呼んだときに、やはり京都・名古屋往復の旅費をこちらが出して、講演をおこないました。

東大や京大のような大きなところが渡航費用を出して、有名人を呼んでくれるわけです。そこを旅費と南山大学での講演料だけお支払いすることで名古屋に来てもらう形で相乗りさせ

ていただいたのです。個人的に、せっかく誰々さんが日本に来るので名古屋にも呼んでくれないかと、お願いが来たのは幸運でした。そのおかげで、大変有名な研究者と接することができて、幸いだったと思います。

さらに考えたのは、もともと『Asian Folklore Studies』も含めまして、日本の研究、いわゆる日本の民俗学の研究も一つ視野に入っていたはずだということです。

たまたま、私の個人的なコネクションなのですが、神奈川大学と國學院大學と成城大学、さらに愛知大学のほうで民族学の研究所が集まった連合研究会をおこなっていました。ある時、愛知大学の研究会に呼ばれた時に、次は南山大学でやってくれということで南山大学も加わって、5大学研究所連合というのをつくりました。いわゆる民俗学、フォークロア系の研究会をやりました。

このときは、研究所に民俗学や地理学、民芸研究を専門にしている濱田琢司先生がいらっしゃったので、濱田先生と相談して、こういうことを実現させました。この後、ちょっと絶えているのですが、この前も関係者とお会いしたときに、「またやりたいね」「南山大学も加わってね」という話になっていたので、「はい、ぜひ」というお話しをしました。

それから、もう一つは、学際的な研究で、いわゆるピュアサイエンスと人類学がガチでぶつかってみようということで、「天文学と人類学の融合」という研究会を過去3年間、やってきております。たまたま私は国立天文台の天文学者に知人が多かったこともあって実現しました。本当は国立天文台でやることになっていましたが、予算がうまく取れなかったようです。天文台も頭が固くて、何で人類学や民族学と天文学が一緒にやるのかということで、企画が潰れたということも聞いたので、「じゃあ、人類研でやるから」ということで引き受けて、過去3回やりました。1回休んだのですが、今年も3月に人類研で国際シンポジウム、中国やニュージーランドやインドのほうから天文学者を呼んで、大きな曆に関するシンポジウム、第4回目の「天文学と人類学の融合」をおこなう予定です。

それと関連して、社会アウトリーチとして、私が個人的にやっている「星空人類学」というものもおこないました。「人類学フェスティバル」という、人類学を楽しく、敷居を低くして、一般の方



写真9

に伝えていこうという試みを人類学研究所が主催するもので、過去何年間か開催しています。

最初は2009年におこないました。これは、どこからのサポートもなく、私が個人的にやりました。一時は絶えていたのですが、私が所長になってから、人類学研究所が主催して「人類学フェスティバル」をやっていこうと、一般の方に人類学の面白さを伝える企画をやろうということで、今年もやりました。

これは、先ほど言いました「天文学と人類学の融合」の、いわば社会還元版です。より一般の方に楽しさを分かってもらうことを目的としています。民族学や考古学の展示と、プラネタリウムによる解説を融合させたイベントです。

最後に、人類学研究所が目指すべきもの、さまざまなことを今後も継続して行ってほしいと思うのですが、やはり「人類」を研究する場であろうということです。それに、こういう研究所というのは、なかなか日本でも貴重です。さらに、現在、「アンソロポシーン」つまり、「人新世」という概念が出てきましたし、一部の社会では、民族分断、宗教分断、ヘイトスピーチ等がすごく多くなってきました。こういう時代であるからこそ、あらためて「人類」というのは何なのかということを考える必要が、むしろ生じてきたのではないかと思います。

そのために、「人類学研究所」なので、やはり「人類」を研究する研究所として活動していくべきだろうということです。4つ目のポリシーとして、積極的にそういう研究会もやってきました。

その一つとして、国立科学博物館が進めています「3万年前の航海」というのが、この前、成功して、NHKでも映されましたが、その走りになる、「琉球列島最古の航海者を探る」という大きなシンポジウムを人類研主催で開催しました。これは、今年の7月に実証航海が成功して、丸木舟が台湾から与那国島に到着したときの写真です(写真10)。

来週、私は、このことと関係したシンポジウムで船の話をするために台湾の台南に行かなければならないのですが、人類学研究所はこのような、やはり「人類」のマクロな研究をする研究所としてあるべきではないかと思います。

最後になりますが、人類学研究所の所員、私も含めて何人かの人間が関わっている「出ユーラシアの統合的人類史学」というものが、今年から5年間、「新学術領域」という大きな科研を獲得することができました。本部は岡山大学に置かれているのですが、協力する機関として、東大の総合研究博物館をはじめとして、人類学研究所もこれを形成する一翼を担っておりますので、こういう大きなプロジェクトの拠点の一つとして、研究所がこれからプレゼンスを高めていく必要があるだろうと、また、これはもう始まっていますから、可能であると思います。

今日はスライドを作ってきませんでしたが、同時に2019年に理化学研究所で「文明的人間

の起源、新ホモ・サピエンス学」という、別の新しいプロジェクトがスタートしまして、私も加わっています。これは、理化学研究所が遺伝学や考古学、さまざまなデータをスーパーコンピューターに入れて人類の進化の過程の解析



写真10

をしようという大プロジェクトです。その中で、神話の要素も入れるということで、実は山田先生にも入ってもらって神話の研究グループを立ち上げたところです。

最初の研究会は、7月に1泊2日の日程を立て南山大学でおこないました。この前の10月には東北大学で山田先生にお世話になって開催してきたのですが、そういうものの一翼を担っていくことも可能性を広げると思います。というのは、もともと人類学研究所は、シュミットの世界的な人類史を希求して、あるいは沼澤喜市先生が日本神話を世界の神話から位置づけた、そのような方々がオリジンにいたわけです。先ほどの山田先生のお話でもあったような、狩猟採集民でも古い段階と、牧畜民に繋がっていくような新しい段階の神話に分かれるのではないかという展望、そのような人類史の大きな、マクロな新しい仮説が出されてきていますので、そういうものも研究する一つの場として、今後研究所が存在感を示していく必要もあるし、それは可能であろうと考えております。

私はこういう研究所であればいいなと思って、今後も協力していきたいと思います。ありがとうございました。

参考文献

後藤 明

2010 「60周年記念第2回シンポジウム「人類学研究所の原点と将来像」報告」『人類学研究所通信』17/18: 36-51。

南山学園

2011 『南山大学の人類学』南山学園史料集6。

渡邊 学

2007 「人類学研究所の活動の見直しと将来構想の策定に向けて」人類学改組検討委員会資料。

2008 「人類学研究所の歴史と評価」『アルケイア——記録・情報・歴史』2: 63-99。

渡邊 学(編)

2010a 「人類学研究所改組検討委員会報告書(抜粋)」『人類学研究所通信』17/18: 11-20。

2010b 「人類学研究所小史」『人類学研究所通信』17/18: 2-7。